

日本中國學會報 第七十三集  
二〇二一年十月九日 發行 拔刷

詩集十五卷から『白氏長慶集』の詩卷へ

——白居易と元稹の編集理念の違い

盧

旭

# 詩集十五卷から『白氏長慶集』の詩卷へ

——白居易と元稹の編集理念の違い

盧 旭

## 一、はじめに

中唐以降、自ら詩文集を編集する文人が多く現れるようになる。中でも、白居易（七七二〜八四六）は生前に何度も詩文集の増補修訂をくりかえしており、自覺的に自作を保存しようとした点で他に類を見ない。現存する彼の詩文集『白氏文集』は、すでに散佚した四巻を除けば、ほぼ原型のまま傳わり、その成立過程を考察することが可能である（表一参照<sup>1)</sup>。

表一 『白氏文集』の成立過程

成立年	文集名、巻數	根據資料
元和十年（八一五）	詩集十五卷	1486 「與元九書」
長慶四年（八二四）	『白氏長慶集』五十卷	元稹 「白氏長慶集序」
大和二年（八二八）	『白氏文集』五十五卷	2193 「後序」
大和九年（八三五）	『白氏文集』六十卷	2948 「東林寺白氏文集記」

詩集十五卷から『白氏長慶集』の詩卷へ

開成元年（八三六）	『白氏文集』六十五卷	2949 「聖善寺白氏文集記」
開成四年（八三九）	『白氏文集』六十七卷	2955 「蘇州南禪院白氏文集記」
會昌二年（八四二）	『白氏文集』七十卷	3598 「送後集往廬山東林寺兼寄雲臯上人」、 3673 「白氏文集後序」
會昌五年（八四五）	『白氏文集』七十五卷	3673 「白氏文集後序」

本稿で扱うのは前二回の編集、つまり、元和十年の詩集十五巻と長慶四年の『白氏長慶集』五十巻に關してである。白居易の作品整理は詩集十五巻に始まるが、そのままの形では傳わらず、後世の傳本の祖型となったのは『白氏長慶集』である。ただし、この『白氏長慶集』の編集作業を行ったのは、ほかの時期の詩文集とは異なり、白居易自身ではなく友人の元稹（七七九〜八三二）であった。

元稹は『白氏長慶集』の編集にどの程度關わつたのだろうか。從來の研究は、元稹の關與をほとんど無視するか、或いは元稹は基本的に白居易の分類基準に従つて編集を行ったに過ぎないと考えるものが多

數を占める<sup>(2)</sup>。だが、果たしてそうだろうか。

『白氏長慶集』を編集する前に、元稹はすでに自らの作品を『元氏長慶集』百巻にまとめていた。つまり、長慶末(八二四)の時點で、元稹は白居易よりも多くの經驗を積んでおり、そうした編集上の經驗や理念を『白氏長慶集』に反映させたと考えられる。他方、編集にあたって、元稹はそれまでに白居易自身が編んだ詩集を基礎にしていただろう。では、どこまでが白居易自身の手になる部分であり、どこからが元稹の手になる部分であるのか。また、元稹が白居易のために詩文集を編集する文學的意義はどこにあつたのか。本稿の目的は、『白氏長慶集』(『前集』)の詩巻二十巻を手がかりにして、詩集十五巻成立以後の白居易自身による詩作整理、および『白氏長慶集』に對して元稹が行つた編集作業の實態を詳しく検討し、そこにあらわれた兩者の編集理念の違いを明らかにすることである。

なお、本稿では検討對象を詩作に限定する。詩に注目する理由は、元和十年の詩集十五巻は詩のみ収録されており、『白氏長慶集』の詩巻と對照することができるからである。もちろん、『白氏長慶集』所収の文もまた元白二人の整理を経たと考えられるが、その詳細な経緯は不明の點が多いため、本稿では割愛する。

### 一、白居易による作品整理

#### 二一(一) 詩集十五巻

『白氏長慶集』五十巻のうち、詩巻部分の編集は、詩集十五巻及び元和十年以後にまとめられた詩巻を基礎としている。したがって、元稹の編集理念や作業實態を解明するためには、まず白居易自身が行つた作品整理の情況を知る必要がある。

元和十年(八二五)、白居易は江州司馬に左遷されたのをきつかけに、それまでの文學上の成果を振り返り、自らの詩を整理、編集して詩集十五巻にまとめた。彼の文學理念を表明した1486「與元九書」から明らかのように、この十五巻本の詩集に収めた約八百首の詩は、諷諭(百五十首)、閑適(百首)、感傷(百首)、雜律(四百首餘)の四類に分けられ、創作時期の下限は元和十年である。

まず『白氏長慶集』の詩巻から、元和十年以前の部分を示す(表二)<sup>(3)</sup>。

表二 紹興本前二十巻における元和十年以前の詩

類目	巻次	詩型	元和十年以前の詩の數\總數	備考
諷諭	卷一	古調詩	59/64	* 朱金城によれば、0090~0094「寓意詩五首」と0095~0099「讀史五首」は元和二、十三年の作とするが、左遷以前の作に挟まれた箇所であり、やはり左遷以前の作であろう。末尾の五首は、江州時代や忠州へ赴く途中の作。
	卷二	古調詩	53/58	
	卷三	新樂府	20/20	
	卷四	新樂府	30/30	
	計			162
閑適	卷五	古調詩	53/53	
	卷六	古調詩	48/48	
	計			101
感傷	卷九	古調詩	34(50)**/55	** 繫年から見れば五十首が妥當、後述の考證を參照。
	卷十	古調詩	53/78	
計	卷十二	歌行曲引	9/20	**0909「謫居」と0910「初到江州寄翰林
	計			96(112)

雑律	卷十三 律詩	99/99	張李杜三學士」の二首を指す。1006「編集拙
	卷十四 律詩	100/100	詩成一十五卷因題卷末
	卷十五 律詩	99/99	戲贈元九李二十」も元
	卷十六 律詩	2***/100	和十年の作であるが、
	卷十八 律詩	17/100	詩集十五卷本が完成した後の詩と見なす。
計		317	

表二によれば、古體詩の「諷諭」「閑適」「感傷」の三類はほぼそのまま詩集十五卷の詩の数を留めるのに對し、雜律の詩は計三百十七首であり、四百首餘の數に達していない。少なくとも收録作品數を見ることが、『白氏長慶集』の雜律詩は詩集十五卷の卷次を受け継いでいないが、元和十年以前の「諷諭」「閑適」「感傷」はかなりまとまった形で保存されている。具體的に言えば、卷一〜六の主要部分と卷九〜十の前半は、十五卷本の舊を留めると言つてよい。また、新樂府は一卷か二卷か、歌行曲引は單獨の一卷か否か、必ずしもその正確な卷數を明らかにすることはできないが、十五卷本において、古體詩はおおよそ七卷から九卷の分量、雜律詩は六卷から八卷の分量があったと推定される。つまり、詩集十五卷は古體、近體の別を問わず、各卷五十首前後の詩を收録していた可能性が高い。

## 二一(二) 江州時代の詩作の整理

江州司馬に左遷後、白居易の思想が大きく轉換したとされるが、諸々の痕跡から見れば、江州時代の詩を自ら整理した際にも依然として四分類を採用していたようである。

詩集十五卷から『白氏長慶集』の詩卷へ

「卷一 諷諭」「卷二 諷諭二」の最後には、江州左遷以後の詩が増補され、江州時代の閑適詩は「卷七 閑適三」の一卷にまとめられる。感傷詩は卷九の最後と卷十の後半に分けて收録される。おそらく江州時代の「諷諭」と「感傷」に該當する詩は一卷にまとめられるほどの分量がなかったため、内容に應じてそれぞれの分類に追加されたのであろう。

前述のとおり、雜律詩は詩集十五卷の四百餘首に比べて、百首ほど少ない。自作を大切に保存するという白居易の態度から考えれば、これらの減少分がすべて亡佚したという可能性は極めて低いであろう。

また、『白氏長慶集』の編集過程で元稹によつて削除された可能性も同様に低い。というのも、元稹は「白氏長慶集序」において、「因得盡徵其文、手自排續（因りて盡く其の文を徵するを得、手自ら排續す）」と述べており、元稹が白居易の了承を得ずに妄りに詩を削ることは考えがたいからである。

亡佚もしくは元稹による削除の可能性を排除すると、元和十一年（八一六）から長慶四年（八二四）の間に、白居易が自身の詩集を修訂し、意に染まない雜律詩を削除したという結論が得られる<sup>4</sup>。つまり、白居易はすでに成立した十五卷本を基に、後から詩作を整理し直していたのである。

## 二一(三) 元和十四年から長慶四年までの詩作の整理

元和十四年（八一九）に忠州刺史に轉任してから長慶四年（八二四）に『白氏長慶集』が成立するまでの期間、「諷諭」に分類された詩は一首も見當たらず、事實上「諷諭」類が消滅したと言える。しかし、當時、「閑適」「感傷」という二つの分類はなお存続しており、五言古

詩は現卷八（閑適）、卷十一（感傷）に、七言古詩と雜言古詩は歌行曲引として現卷十二に入れられた。

ただし「閑適」「感傷」所收の詩は、實のところ、それぞれ制作年代を異にする。卷十一には元和十四年（八一九）から長慶二年（八二二）までの忠州刺史在任中から長安復歸期間の五言古詩、卷八には主に長慶二年（八二二）から四年（八二四）までの杭州刺史在任中の詩作が収録される。要するに、感傷詩が作られた時期には閑適詩が作られず、その逆もまた然りであつた。

これは白居易がある特定の時期に閑適詩や感傷詩を集中的に創作し、他のカテゴリーの古體詩を作らなかつたことを意味するのであろうか。白居易の人生の經歷を考察すると、そのようないわば「集中創作」説はある程度理に適っているようである。しかし、詩の内容面から判断すれば、やはり妥當とは言えない。

例えば「卷八 閑適四」には感傷詩的な作品が含まれ、逆に「卷十一 感傷三」にも閑適詩的な作品が混在している。さらにその中には、諷諭詩らしきものさえ見られる。このように、白居易の詩の分類には部分的に混乱があり、上の「與元九書」の四分類の原則に忠實に従つたとは考えがたい。卷八と卷十一は、むしろ創作時期と詩型に基づいてまとめられたものであろう。

こうした混乱した収録情況を見れば、元和末（八一〇）の時点で、1486「與元九書」に提起された四分類はもはや事實上崩壊していたと言える。この後、白居易は『後集』において自ら四分類を放棄し、詩作を古體（格詩）と近體（律詩）の二つに分類して整理するようになった。『白氏長慶集』の段階ではまだ四分類を維持しているが、その原因はおそらく編集者の元積にある。

### 三、元積による編集作業

#### 三（一）四分類の維持

「白氏長慶集序」に云う、「長慶四年、樂天自杭州刺史以右庶子詔還、予時刺會稽、因得盡徵其文、手自排續、成五十卷（長慶四年、樂天 杭州刺史より右庶子を以て詔還せらる。予 時に會稽に刺たり、因りて盡く其の文を徵するを得、手自ら排續し、五十卷と成す）」。長慶四年（八二四）五月、白居易は都長安に召還され、十二月十日に元積がこの序を書き、『白氏長慶集』の完成を記した。つまり、わずか約七ヶ月という短期間で元積は編集作業を終えたことになる。また、「盡く其の文を徵するを得」という言い方からは、白居易が編集を元積に依頼したのではなく、元積のほうから自發的に編集を求めたことが窺える。元積は、親友兼好敵手である白居易のためにどうしても自分の手で詩文集を編集しなかつたのであろう。「元白」並稱は當時すでに廣まつており、『元氏長慶集』を自ら編集した元積は、白居易との合集という形で「元白」二人揃つて世間の稱贊を受けることを望んでいたのではなからうか。

當然のことながら、元積は白居易の詩を非常に丁寧に扱つたようである。現行の『元氏長慶集』卷二十二に「爲樂天自勘詩集……越中冬夜風雨、不覺將曉、諸門互啟關鎖、即事成篇（樂天が爲めに自ら詩集を勘じ……越中の冬夜に風雨あり、將に曉ならんとするを覺えず。諸門互いに關鎖を啓く。事に即して篇を成す）」と題する絶句があるように、元積は夜を徹して友人のために詩集を校勘した。ここでは「文集」ではなく「詩集」と明言されており、元積が特に詩を重視したことが分かる。前述のとおり、『白氏長慶集』の編集以前に白居易の四分類自體は事

實際上崩壊していたと考えられるが、なぜ元楨はそれを維持して編集したのであろうか。まずは元楨自身の詩文集に對する分類の基準と方法を確認しておく必要がある。

元和七年（八二二）、元楨は詩集二十卷を編集した際に、「古諷」「樂諷」「古體」「新題樂府」「律詩五言」「律詩七言」「律諷」「悼亡」「艷詩古體」「艷詩今體」の十體による分類を採用した。「敍詩寄樂天書」に記されるとおり、詩の分類によって自らの文學理念を反映させるのは元白に共通する態度であったのである。その後、長慶中に自ら編集した『元氏長慶集』百卷は現在そのままの形では傳わらないが、宋人が整理した『元氏長慶集』六十卷は百卷本の舊貌をある程度保存している。そこから窺えるのは、元楨が『元氏長慶集』を編集する際に、十體を簡略化して「古詩」「樂府」「古體詩」「挽歌」「傷悼詩」「律詩」に分類したということである。しかも、この分類方法は白居易の四分

表三 元白『長慶集』の詩の分類

『元氏長慶集』	古詩		樂府		古體詩	(挽歌) 傷悼詩	律詩
	諷諭		感傷				
『白氏長慶集』	古調詩(卷一、二)		新樂府(卷三、四)		古調詩(卷九、十)	古體(卷十一)	雜律
	歌行曲引(卷十二)		閑適				

類にかなり近く、表三に示すとおり、元白の分類は相互に對應し合っている。

二一(三)に述べたように、白居易は元和末ごろの時點すでに詩を分類するという主張を放棄していた。ところが、長慶末に元楨が入手した白居易の詩卷には、四分類に基づいて整理された大

部分の卷と、制作時期や詩型によって整理された少數の卷とが混在していたのである。

「元白」を合わせた結果を意識している以上、詩の分類によって自らの文學理念を表そうとする元楨にとつて、白居易の四分類を捨てるのはやはり惜しかったにちがいない。また、「白氏長慶集序」末尾には「樂天之長、可以爲多矣(樂天の長ずるところ、以て多しと爲すべし)」と、白居易の詩の四分類と多様な文體の美點を稱えている。元楨は白居易を全方位型の文人としてアピールしようとしたのである。そのため、四分類が事實上崩壊していたとはいえ、元楨はあえて既存の分類を引き繼いだと考えられる。

あるいは、そのときの元楨には、白居易が整理した不揃いの詩卷の構成を打破し、『白氏長慶集』のために新たに編集し直すという方法も採り得たかもしれない。しかしその場合、作業量が増えてしまう。元楨が直面する大きな問題は時間が足りないことであった。長慶四年(八二四)正月に唐の穆宗が崩御し、敬宗が即位した。白居易が都に召還された五月時點で、元楨はすでにその年が長慶最後の一年だと知っていたことになる。「白氏長慶集序」にも「予以爲陛下明年當改元、長慶訖於是、因號曰『白氏長慶集』(予以爲らく陛下明年當に改元すべし、長慶是こに訖ると、因りて號して『白氏長慶集』と曰ふ)」という。完成が遅くなれば、「元白」合集の『長慶集』とは呼べない。實際に序に記された日付は「十二月十日」であり、元楨はかろうじて年内に『白氏長慶集』の編集を完了したのである。

以上の理由により、元楨は白居易の整理した詩卷に基づきつつ、四分類を維持したと考えられる。元和十四年以後、白居易は四分類を事實上放棄したとはいえ、詩を古體と近體に區別している。四分類を維

持しようと思うのならば、元和十四年から長慶四年までの古體詩を分類すればよい。それが現行の『白氏長慶集』卷八(閑適)と卷十一(感傷)である。しかしこの作業はいささか機械的であり、白居易が整理した既存の詩巻を單に「閑適」や「感傷」というカテゴリーに當てはめたに過ぎないものであつた。その結果、二(一三)で述べたように、當該分類に合わない作も混在する結果を招いてしまった。

さらに注意すべきは、卷十一巻頭の内題部分が「古調詩」ではなく「古體」と記される點である。『白氏長慶集』において、五言古詩を収録する巻のうち、卷十一を除けば、巻頭にいずれも「古調詩」と記される。つまり、白居易にとつて「古調詩」とは即ち五言古詩を指し、「諷諭」「閑適」「感傷」の各類を通じてそれは一貫している。

しかし杜曉勤によれば、元稹にとつての「古體」は白居易の分類と異なるという。まず元稹の十分類(十體)には「古諷」と「古體」の二つの區分があり、『元氏長慶集』は「古詩」と「古體詩」に分ける。つまり、十分類における「古體」と『元氏長慶集』の「古體詩」は、「諷諭」以外の五言古詩を指す。杜氏の見解に依據すれば、元稹の分類方法が變化したとはいえ、「古體(詩)」が指し示す範疇は同じということになる。

元稹が古體詩を「諷諭」と非「諷諭」に大別するだけであつたのに対し、白居易は詩集十五卷において、非「諷諭」の古體詩の中から「吟玩情性者(情性を吟玩する者)」(486「與元九書」の語)に適用する作品を「閑適」という新しいカテゴリーとして獨立させ、それ以外の作品を「感傷」に入れたのである。つまり、「閑適」と「感傷」の二類を區別しなければ、元稹の「古體」になる。『白氏長慶集』卷十一の「古體」という名稱はまさにそうした分類基準に則つたものにほか

ならない。元稹はこの點を明確に意識して卷十一を特に「古體」と題し、全體を通して「閑適」の内容を表現したとはいひがたいこの一卷を「感傷」に入れたのではないだろうか。

また、卷八も元稹によつて新たに増補された巻であるが、一部の例外を除き、全體的に「閑適古調詩」という分類にふさわしい詩が収録されている。白居易は五言古詩を「古調詩」という名稱で示しており、少なくとも詩集十五卷本に相當する巻においては、各巻内部の作品の風格が統一されている。元稹は『白氏長慶集』を編纂する際、白居易のそうした基準を十分に尊重し、風格の均一性が保たれた卷八の巻頭に「古調詩」と題したのであろう。

### 三(二) 元稹の形式美追求

元稹の分類方法については、やや機械的であるとのそしりを免れないが、しかし實は彼なりの美意識を持つていたと考えられる。巻次を追つて『白氏長慶集』を通覽していけば、元稹はことさら紙幅と卷數に配慮していたことが見て取れる。言うまでもなく、『白氏長慶集』が完成された時點の詩文集の形態は卷子本である。その元來の體例はすでに知るよしもないが、紹興本『白氏文集』に基づいて推測を試みたい。紹興本『白氏文集』は每半葉十三行、行二十二〜二十七字前後である。古體詩を収めた前十二卷の収録作品數と行數を示すと、表四のとおり。なお、行數は各巻の首尾にある「白氏文集卷第〇」(當該の行も含む)の間の行を計算したものの。ただし、卷六の末尾だけは「六卷終」と表示されるので、その行を終點として數えた。

卷一、二、九、十、十二を除くと、他の巻はおよそ二百七十行前後の分量である。卷一、二は他の巻よりも多いが、この二巻の行數はほ

表四 紹興本『白氏文集』前十二巻の  
作品数と行数

巻次	類目	作品数	行数
巻一	諷諭一 古調詩	64	396
巻二	諷諭二 古調詩	58	403
巻三	諷諭三 新樂府	20	273
巻四	諷諭四 新樂府	30	255
巻五	閑適一 古調詩	53	267
巻六	閑適二 古調詩	48	286
巻七	閑適三 古調詩	58	273
巻八	閑適四 古調詩	57	273
巻九	感傷一 古調詩	55	238
巻十	感傷二 古調詩	78	361
巻十一	感傷三 古體	53	283
巻十二	感傷四 歌行曲引	29	329

ば同じ。これは紙幅の均等を求めた結果であろう。また作品数については、巻三、四、十二が他に比べてかなり少ないが、新樂府や歌行を収録したこれらの巻は各首が長篇の詩である点を考慮するべきであろう。五言古詩の場合、やや多い巻一、十のほか、巻六の作品数も揃わないが、それ以外の六巻はおおむね五十五首前後である。巻ごとの紙幅を調整しただけでなく、作品数のバランスも考えて収録したようである。

一方、白居易自身が編集した際には、各巻内部の體裁を揃えることを重視している。巻一、二には五言の諷諭詩がまとめられるが、巻一には主に單篇の作品が収録され、少数ながら三首以下の連作もある。巻二は五首以上の連作で構成される。江州時代もしくはその直後に作った諷諭詩は

二首と三首の連作がそれぞれ一組あるが、主に單篇の作品である。白居易の基準に則れば、本来はすべて巻一に加えるべきであったと考えられるが、実際には巻一、二に分けて増補され、その結果、これら二巻の紙幅はほぼ均等になった(表五)。

表五 江州時代(元和十年)以後の諷諭詩

巻次	詩題	繫年
巻一	0059 「放魚」	元和十三年
	0060 「文柏床」	元和十三年
	0061 「廬山桂」、 0062 「溢浦竹」、 0063 「東林寺白蓮」	元和十三年
	0064 「大水」	元和十三年
巻二	0119、0120 「歎魯二首」	元和十三年
	0121 「反鮑明遠白頭吟」	元和十三年
	0122 「青塚」 0123 「雜感」	元和十四年前後 元和十三年

これは、白居易自身が表五に列挙した計十一首の諷諭詩をすべて巻一に収めたのに對し、元稹は巻一の末に配列していた作品を巻二に移して紙幅を調整したのではなからうか。傍證となるのは、0122 「青塚」だけが元和十四年前後の作であり、他の詩よりもやや遅い点である。つまり、巻二の増補部分の創作時期は巻一の増補部分のそれよりも遅く、もともと巻一の末尾にあったものが、後から巻二に移動され



た可能性がある。

また、巻九の後半も別の巻から後に移動されたものと考えられる。元和十年までの詩集十五巻に収録された部分とそれ以後の増補部分に分けて、巻九と巻十「感傷古調詩」の構成を見てみよう(表六)。

表六 巻九、十所収作品の構成

	詩集十五巻(元和十年まで)	元和十年以後の増補	
巻九	0392「西明寺牡丹花時憶元九」～0425「秋日」	0426「將之饒州江浦夜泊」～0446「秋月」	21首
巻十	0447「朱陳村」～0499「江樓聞砧」	0500「宿東林寺」～0524「答元郎中楊員外喜烏見寄」	25首

巻九と巻十それぞれの後半に元和十年(八二五)以後の作品の増補がある。巻十の後半は元和十一年から十三年までの作であり、創作時期が連続しているため、違和感なく読み進めることができる。ところが巻九の場合、後半に入ると、前の時期の作品に突然廻ることになり、不自然な印象を受ける。0392「西明寺牡丹花時憶元九」から0425「秋日」までの前半部分の三十四首は永貞元年(八〇五)から元和七年(八二二)の作であり、0426「將之饒州江浦夜泊」から0446「秋月」までの後半部分の二十一首は時間の幅が大きく、貞元十四年(七八八)から江州時代までの作である。つまり、後半部分の創作時期が前半部分を覆うような形となっている。また巻十の創作時期を見ると、冒頭二首を除けば、巻九前半の0425「秋日」の續きに當たる。要す

るに、巻九の後半は明らかに後から挿入した部分であると判断できる。この問題について、巻九後半と巻十後半はもとと一卷だったのではないかと筆者は考えている。朱金城は、巻九末尾の0442「新秋」から0446「秋月」までの五首を江州時代の作と推定するものが秋の季節と關わる。0442「新秋」は秋の始まり、0443「夜雨」にも「早蛩」という語を使い、初秋の作と思われる。0444「秋江送客」には「秋鴻次第過(秋鴻次第に過ぐ)」、0446「秋月」には「落葉聲策策(落葉の聲は策策たり)」と詠まれ、秋の深まった光景を描出している。これらの點から、筆者はこの五首がいずれも同じ元和十一年(八一六)秋の作であろうと判断する。また、巻十後半の0500「宿東林寺」から0507「寄行簡」までの八首は、朱金城によれば元和十一年の作とされるが、0500「宿東林寺」の「風雪宿東林(風雪東林に宿る)」という句に基づけば、同年冬の作であると推測できる。

以上を要するに、巻九の後半と巻十の0500「宿東林寺」以下の詩は創作時期が連続しており、これらの詩は元和十三、四年に白居易が新たな一卷にまとめ直したものと想定できよう。この巻(巻九後半+巻十後半)の作品数は計四十六首であり、冒頭は左遷前の補遺部分、0442「新秋」以下は江州時代の感傷詩に當たる。のちに元稹が『白氏長慶集』を編集した際、三卷あつた詩を二卷にまとめ、後ろの一巻を二分したうえで、前半を現巻九に、後半を現巻十に加えたのではないかと推測される。その結果、巻九の紙幅は他の巻よりもやや小さく、巻十のほうはやや大きくなったが、許容できないほどの差ではない。紙幅のバランスよりも、「諷諭」「閑適」「感傷」をそれぞれ四巻として構成すること、つまり各巻の卷数を一致させることを優先したので

あろう。

なぜ巻九と巻十の後半は白居易が編集した部分であり、元稹によって長慶末に整理増補されたのではないと言えるのか。その證據として題下注の形式が挙げられる。0427「思歸」に「時初爲校書郎（時に初めて校書郎と爲る）」、0435「祇役駱口驛喜蕭侍御書至兼觀新詩吟諷通宵因寄八韻」に「時爲整屋尉（時に整屋の尉と爲る）」という題下注がある。これらは詩卷にまとめる時に加えられたものであるが、このような「時」の字の用法は、白居易の元和十年以前の題下注と一致する。これに對して、元稹が創作時期を示す題下注を附す際には、例えば『元氏長慶集』巻九「哭女樊四十韻」に「虢州長史時作（虢州長史の時作）」、「哭子十首」には「翰林學士時作（翰林學士の時作）」とするなど、白居易とは「時」の字の位置が異なる。わずかな措辭の差に過ぎないとはいえ、『白氏長慶集』巻九後半の詩がもともと白居易自ら編集したという傍證の一つとなる。

ここで、もう一つ疑問が生じる。白居易が元和十三、四年に新たに編集した一卷を最終的に取り込むのであれば、なぜ三卷をそのまま半分に分けて、後ろの一卷を二分して、それぞれ前の二卷に加えたのか。これはおそらく、各詩卷の詩を配列するに当たり、創作時期の順序が少々崩れたとしても、巻頭の第一首にはできるだけ特別な意味を持つ詩を置きたかつたからであろう。

例えば諷諭詩の巻一卷頭に置かれた0001「賀雨」は、元和四年（八〇九）の作であり、制作年代から言えば、最初の諷諭詩ではない。ただ、この詩は1486「與元九書」や元稹「白氏長慶集序」に言及され、また穆宗の「親批」を賜ったものであり、白居易にとって思い入れのある記念碑的作品であつたはずである。閑適詩については、巻五

の第一首に當たる0175「常樂里閑居偶題十六韻兼寄劉十五公興王十一起呂二冥呂四穎崔十八玄亮元九稹劉三十二敦質張十五仲方時爲校書郎」は、閑適の志を初めて表現したものであり、多くの友人たちとの絆が描かれる。また巻六の第一首は0229「自題寫眞」であり、巻五と併せてみると、下邳時代の詩の中に京官時代の一首だけが挿入されている。「寫眞」という主題はこの後も人生の節目ごとに何度も詠まれており、やはり白居易にとって特別な意味を持つものであつた。感傷詩については、巻九冒頭の0392「西明寺牡丹花時憶元九」は元白友情の證とも言える作であり、巻十冒頭の0447「朱陳村」は白氏ゆかりの地である徐州の村を描き、詩の後半には白居易のそれまでの人生を回顧した自傳的な作品である。もし三卷を半ばから二分したとすれば、その後半に當たる巻の冒頭には、おそらく下邳時代の作が配置されるであろう。しかし、下邳時代の詩には、0447「朱陳村」の持つ特別な存在感を超えるような作は見出しがたい。おそらくは、このような配慮のもと、元稹は前の二卷をそのままにし、後の一卷を分割したのだと考えられる。

そもそも詩集十五卷を編集した時点で、各巻の第一首には特別な意味を持つ詩を選ぶ傾向があつたのではないか。雑律詩の場合も、巻十三、十五、十六の冒頭に「元和體」と呼ばれる百韻の排律が配置される。雑律詩の巻が元稹によつて合併、調整されたとしても、巻頭に重要な作品を置く傾向は變わらない。

『白氏長慶集』のうち、古體詩に當たる「諷諭」「閑適」「感傷」は各四卷ある。前述のとおり、これは元稹が各類の卷数が均等になるように調整した結果であろう。卷数の調整に關しては、感傷詩を収める巻十二は別の二卷を合併して作られた、と靜永健がつとに推測した。

静永氏の推測と筆者の考察とをあわせて考えると、假に元積が調整しなかつた場合、「感傷」に當たる詩卷は全部で六卷に及び、「諷諭」「閑適」よりも卷數が多くなり、紙幅のバランスが悪くなってしまう。元積の手を経ることによつて、各類四卷という構成に再編され、各卷の紙幅も均等に近づいたのである。

また新樂府五十首は、『白氏長慶集』卷三に二十首、卷四に三十首收められるが、これも元來一卷であつたものを、元積が紙幅と卷數に配慮して二卷に分割したのではないか。實際、表四を見ると、卷三と卷四は作品數こそ異なれ、紙幅はほぼ同じである。

白居易は新樂府五十首を一つのまとまりとして捉えており、もともと二卷であつた痕跡を發見することはできない。假に新樂府五十首が元來一卷であつたとすれば、元和末に白居易が整理した詩集の古體詩部分は、次のような構成であつたと想定される。これは元積が編集に關與する以前、元和末の時點におけるいわば中間形態のテキストである。

諷諭…卷一（主に單篇）、卷二（五首以上の連作）、卷三（新樂府）

閑適…卷四（現卷五）、卷五（現卷六）、卷六（現卷七）

感傷…卷七（現卷九前半）、卷八（現卷十前半）、卷九（現卷九後半+

現卷十後半）、卷十、卷十一（舊卷十、舊卷十一は現卷十二に

合併）

このように想定する根據は二つある。一つは、卷十一に0572、0573「曲江感秋二首」（長慶二年「八二二」）があり、その序に「元和二年、三年、四年、予每歲有曲江感秋詩凡三篇、編在第七集卷（元和二年、三年、四年、予每歲に曲江にて秋を感じる詩有り。凡そ三篇、編して第七集の卷に在り）」という點である。元和年間に詠じたその三首の詩

(0398「曲江早秋」、0406「早秋曲江感懷」、0417「曲江感秋」)は現卷九前半に收められるが、白居易の編集段階では「第七集の卷に在り」、卷七という筆者の假説と符合する<sup>20)</sup>。

根據の二つ目は、金澤本卷十二の卷頭に「凡八十五首」と記されている點である。「八十五首」という分量から考えれば、その卷は雜律詩であると思われる。しかし、實際には二十九首の「歌行曲引」が収録されており、金澤本の數字は先行テキストから引き寫した可能性がある。つまり、元和末の時點、白居易による中間形態のテキストにおいて、卷十二は八十五首の雜律詩であつたことになり、筆者の想定と一致する。この中間形態のテキストの存在を想定する假説の當否については、今後改めて検討したい。

表二に示したとおり、雜律詩の卷は作品數の整齊をより重視し、それぞれ百首が収録される<sup>21)</sup>。これも元積による調整の結果であろう。二(一)で分析したように、詩集十五卷本は古體、近體を問わず、各卷五十首前後を收めた可能性が高い。白居易による中間形態を反映したと思しき金澤本卷十二の卷頭にも「凡八十五首」と記され、きつちり百首ではない。このような整つた數字への拘りは元積の美意識を表したものであり、とりわけ卷十八と卷十九は意圖的に調整した痕跡が明らかである。

卷十八には主に元和十四、五年（八一九、八二〇）、忠州時代の作を収録するが、1185～1188「德宗皇帝挽歌詞四首」以下十七首の創作時期は永貞・貞元年間にまで遡る。1189「昭德王皇后挽歌詞」以下の多くは題目に「詞」字を含み、白居易個人の生活や事跡と直接關わらない。卷十九の1287「聞夜砧」から1298「閨婦」も創作時期の曖昧な歌謠風の作である。これは白居易が整理した歌詩一卷を分割

し、それぞれ巻十八と十九に加えたと考えられる。

このほか、巻十四末尾の0804「和夢遊春詩一百韻」は平仄が合わない句が多く、排律と稱するのに抵抗感がある作である。創作時期も前に置かれる作品よりも早く、おそらく數合わせのために「律詩」の巻に配置されたのであろう。興味深いのは、元頴の原唱「夢遊春詩七十韻」も排律ではない。しかし、彼は『白氏長慶集』において形式美を追求するために、詩型の差異さえも無視したのである。

なぜ形式美を追求したのが元頴であると言い切れるのか。元頴の場合、その別集は原貌を留めておらず、各巻の構成や紙幅に關する考察はもはや不可能である。しかし現在に傳わる記録に限っても、元和七年（八一二）に詩集八百首を十體二十巻に分類し、長慶中には『元氏長慶集』を百巻に、『白氏長慶集』を五十巻にまとめており、元頴が切りのよい數字を好んだことは明らかである。これに對し、白居易が開成四年（八三九）に編集した『白氏文集』は六十七巻、しかも多數の律詩の巻と異なり、卷六十七の收録作品數は七十五首である。どうやら白居易はさほど整った數字に拘りがあつたわけではないようである。數字上の形式美を追求したのは、やはり元頴であつたにちがいない。

#### 四、終わり

以上の論述をまとめると、元頴が長慶年間までに入手したのは、白居易自編の詩集十五巻本をもとに整理した詩集、および元和十三（八一八）年以後の詩體別の詩巻である。元頴は『白氏長慶集』の編集に際し、さまざまな要素を考慮しながら、四分類を維持しようとした。例えば江州時代以後の五言古詩は紙幅のバランスをとって二巻に收録

詩集十五巻から『白氏長慶集』の詩巻へ

されたが、おおよその風格によつて「閑適」と「感傷」の二類に分けるのみで、個々の詩の分類が不自然であつても特に調整してはいない。このほか、元頴は卷數、各巻の紙幅や作品數をなるべく均等にすため、詩の配列を調整したり、一部の詩巻を分割したり、分割したものを合併したりした。現在、我々が確認できる『白氏長慶集』の詩巻は、このような元頴の關與を経て完成されたものである。整つた數字や均等性といった形式美の追求こそが元頴の編集理念の根幹にほかならない。

のちに『後集』を編集する際、『白氏長慶集』に體現された元頴の形式美の追求は白居易にも少なからず影響を與えた。例えば多數の律詩を各巻百首にまとめると、『前集』との連續性が感じられる。これが元白の編集理念の違いを區別しがたくする原因となつたのである。

中國のいにしへの文人たちは必ずしも創作においてのみ自らの文學觀を語るとは限らない。本稿が論じてきたように、元白による詩文集の編集という行爲の裏には、創作者であると同時に編集者でもあつた彼ら自身の文學觀が潜んでいると言える。このような着眼點に基づけば、『白氏長慶集』以後の詩文集編集に關する諸問題、例えば『白氏後集』における「格詩」の定義、あるいは白居易の唱和詩に對する態度などを解明する手がかりが得られるであらう。本稿の知見を出發點として、今後はそうした問題についても考察を深めたい。

注

(1) 本稿で引用する白居易の詩文は、紹興本を底本とする謝思焯『白居易詩集校注』（中華書局、二〇〇六年）、『白居易文集校注』（中華書局、二

〇(一一年)に基づき、花房英樹『白氏文集の批判的研究』(中村印刷出版部、一九六〇年)による作品番號を附す。元禎の詩文については、周相録『元禎集校注』(上海古籍出版社、二〇一一年)に依據する。

- (2) 例えば花房英樹は「元禎の白氏長慶集編纂への参加は、もしあるとすれば、居易の體系に従いつつ、詩の部において多少の作品を分類配列したにすぎぬのである」(『白氏文集の批判的研究』、一七頁)と述べる。なお、岡村繁『白氏文集 一』(明治書院、新釋漢文大系、二〇一七年、九七頁)は「白居易が五十巻の詩文集の編纂を元禎に依頼した経緯については、彼が元禎をその文學における理解者として最も信頼していたことがまず第一に挙げられるが、この前年(長慶三年)、元禎が自己の詩文集一百巻を編纂したことも大きな引き金になっていたであろう。五十巻・百巻の詩文集編纂ともなれば、紙の調達や副本の作成等において多くの職工を揃えなければならず、白居易の委託は、元禎にかかる便宜を圖つてもらう必要があつたためだとも推測されるのである」と述べ、白居易が元禎の編集経験や文學觀に信頼を寄せており、作業上の便宜を圖つてもらおうとしたことを指摘している。本稿の論旨とも補い合う注目すべき指摘と言える。
- (3) 各巻の内部構成は紹興本を底本とする謝思焯『白居易詩集校注』に據り、作品繫年は朱金城『白居易集箋校』(上海古籍出版社、一九八八年)に従つた。
- (4) 1486「興元九書」にも「他時爲我編集斯文者、略之可也(他の時に我が爲めに斯文を編集する者有れば、之れを略して可なり)」とあり、白居易は雜律詩を古體詩ほど重視しなかつたことが窺える。
- (5) 長慶四年に洛陽に退居した後の作品も卷八の最後に加えられる。
- (6) 「集中創作」と明言していないが、下定雅弘「白居易詩の轉形期——江州時代から杭州時代へ」(『白氏文集を讀む』中編第一章、勉誠社、一

九九六年)は「この(忠州)時代の問題は、何よりも、古體では、なぜ後に感傷詩と分類される作のみが作られたのか、ということである」(三三八頁)、「この(杭州)時期の大きな特徴は、古體に閑適詩が復活し、しかも古體のほとんどを占めるということである」(三四七頁)と述べている。「集中創作」説の根據は、忠州時代から杭州時代に至るまでの白居易の人生や心境の變化にあるが、この點については下定氏論文のほか、芳村弘道「白居易の杭州刺史轉出」(『唐代の詩人と文獻研究』、中國藝文研究會、二〇〇七年、第二部第三章)を参照。特に白居易の杭州時代における「閑適」思想の成熟に關しては、芳村氏論文に詳しい。

- (7) 例えば0345「感舊紗帽」。
- (8) 例えば0555「臥小齋」、0563「負冬日」。
- (9) 例えば卷八0354「自蜀江至洞庭口有感而作」、卷十一0558「蚊蟻」。
- (10) 四分類の混亂について、例えば成田靜香は「忠州では感傷の詩しか作らなかつたのであろうか。……しかしその中にも諷諭的なもの、閑適的なものはある」(『白居易の詩の分類と變遷』、太田次男等編『白居易研究講座 第一巻』、勉誠社、一九九三年、六二頁)と述べ、0558「蚊蟻」を諷諭的なもの、0564「委順」を閑適的なものとする。また、白居易の分類基準に對する理解の相違から、どの詩の分類が不適切なのか、その判断も分かれる。吳雨潔『白氏長慶集』四分類法新探(中國社會科學院研究生院修士論文、二〇一二年)の附録には、多くの先行研究を参照した上で、分類が不適切だと思われる詩が列舉されている。吳氏自身も先行研究のすべてに賛同を示すわけではないが、從來の議論のまとめとして有意義なものである。
- (11) 元禎「敍詩寄樂天書」に「其中有旨意可觀而詞近古往者爲古諷、意亦可觀而流在樂府者爲樂諷、詞雖近古而止於吟寫性情者爲古體、詞實樂流而止於模象物色者爲新題樂府、聲勢沿順屬對穩切者爲律詩、仍以七言

五言爲兩體、其中有稍存寄興與諷爲流者爲律調。不幸少有伉儷之悲、撫存感往、成數十詩、取潘子悼亡爲題。又有以干教化者、近世婦人暈淡眉目、綰約頭鬢、衣服修廣之度、及匹配色澤、尤劇怪醜、因爲豔詩百餘首、詞有今古、又兩體。自十六時至是元和七年、已有詩八百餘首。色類相從、共成十體、凡二十卷（周相錄校注『元稹集校注』、八五五頁）という。十體について簡単にまとめると、元稹は主として諷諭性の有無と詩型によって前の七體を分類した。このほか、内容によって「悼亡」と「艶詩」の類目を立て、さらに「艶詩」を詩型によって古今兩體に分けた。

(12) 宋本『元氏長慶集』には蜀本と浙本の二つの系統があり、いずれも詩を分類している。蜀本系統は殘本しか傳わらず、中國國家圖書館藏殘本『新刊元微之文集』二十四卷（目録を存する）がその一つである。また、浙本系統には明代楊循吉影宋鈔本六十卷があり、明代以降の現存する元稹集は全て浙本系統に屬する。詳しくは周相錄『元氏長慶集』版本源流考（『文獻』二〇〇八年第一期）を参照。蜀本系統は古詩（卷一〜四）、樂府（卷五〜八）、古體詩（卷九〜十二）、傷悼詩（卷十三）、律詩（卷十四〜二十六）とし、浙本系統は古詩（卷一〜四）、古體詩（卷五〜八前半）、挽歌傷悼詩（卷八後半〜卷九）、律詩（卷十〜二十二）、樂府（卷二十三〜二十六）としている。配列は異なるが、基本的な類目は一致する。

(13) 『白氏文集』の紹興本と那波本ともに目録では「古調詩」と記される。「古體」という名稱が誤刻である可能性はもとより否定できないが、しかし目録は刊行に際して作られたものであり、その直前にある卷十卷頭の「古調詩」に移したことによる誤訛か。一方、卷十一卷頭に記された「古體」は元來の形をそのまま留めた可能性が高い。この問題に關しては、古鈔本の新發見を期待するほかないが、現時點では、元稹によって「古體」と題されたと筆者は推測する。

詩集十五卷から『白氏長慶集』の詩卷へ

(14) 杜曉勤『白氏文集』「古體」與「古調詩」之關係（『六朝聲律與唐詩體格』、北京大學出版社、二〇一七年、三〇〇〜三二八頁）を参照。

(15) 赤井益久の指摘によれば、元白は「諷詩」を重視標榜するとともに、「非諷詩」の評価を文學の規範上に位置づけたが、「元稹に「獨善」の傾向は認めにくい」（赤井益久「元稹の政治と文學」、林田愼之助博士古稀記念論集編集委員會編『中國讀書人の政治と文學』、創文社、二〇〇二年、三三八頁）という。實際、「敘詩寄樂天書」の「十體」と『元氏長慶集』には、「獨善」の志を託した白居易の「閑適」に對應する分類が存在しない。「獨善」意識の有無という元白の違いは、二人の詩文集が成る以前、すなわち元和初年にすでに現れていたのである。赤井益久「元稹の文學理念——元和五年を中心に——」（『中唐詩壇の研究』、創文社、二〇〇四年、第三部第四章、二八九〜三三〇頁）、特に元稹「江陵途上十七章」と白居易「和答詩十首」との對比を参照。

(16) 『白氏長慶集』卷十一「古體」と元稹の關係については、杜曉勤がすでに詳細に論じている（『白氏文集』「古體」與「古調詩」之關係）、『六朝聲律與唐詩體格』、三〇〇〜三二八頁）。杜氏の見解には筆者も基本的に贊同する。ただし杜氏によれば、元稹が『白氏長慶集』卷十一を「古體」と題した理由は、元和十年以後、白居易は非「諷諭」の五言古詩ばかりを作り、それらの作が元稹の「古體」に相當するためであるという。つまり、詩風の變化という観点から「古體」を分析するが、卷八になぜ「古調詩」という名稱を留めるのかという問題をあまり深く検討していない。筆者はこの二卷について、各卷内部の風格の均一性という観点から捉えるべきだと考える。なお、各卷の分類が適切か否かについては、吳雨潔『白氏長慶集』四分類法新探」附録を参照。杜氏と筆者いずれの観点であれ、元稹の關與が認められることは確かである。

(17) 使用したテキストは一九五五年文學古籍刊行社影印の紹興本『白氏文

集』である。宋本系諸本のうち、紹興本を使用した理由は、詩の本文と自注以外、他の注や評論が附されておらず、元來の『白氏長慶集』の分量とほぼ同じであるためである。

(18) 卷六には0264「遊悟真寺詩一百三十韻」という長篇があるため、紙幅は揃っているが、作品数は他よりもやや少ない。

(19) 0123「青塚」の創作時期については異説もある。朱金城によれば、この詩は王昭君を詠んだ内容であることから、白居易が忠州に赴任する途次、昭君村に立ち寄った元和十四年前後の作と推測する（『白居易集箋校』、一三四頁）。一方、靜永健は王昭君の生地を訪れての作であることに疑問を呈し、「この詩の繫年も、白氏江州司馬在任中の元和十一年、十三年、或は元和十年、十三年（……）とすべきである」（『白居易「諷諭詩」の研究』下篇第一章「江州左遷と諷諭詩」の注（10）、勉誠出版、二〇〇〇年、二五三～二五四頁）と主張する。

(20) 朱金城『白居易集箋校』によれば、0447「朱陳村」は元和三～五年の作、0448「讀鄧魴詩」は元和三～六年の作である。

(21) 現卷九と現卷十の二巻のものと形を復元するならば、「卷九前半」「卷十前半」「卷九後半十卷十後半」の三巻が存在したことになる。

(22) 例えば卷六の0229「自題寫真」（元和五年）の題下注に「時爲翰林學士」と見える。

(23) これらの題下注が自注であるか後人の注であるかは、推測の當否に關わる。赤井益久「自注の文學——『元氏長慶集』を中心として」（早稲田大學中國古典學會編『中國古典研究』四七、二〇〇二年、三四～五二頁）は、『元氏長慶集』の題下注と割注の性質に論及し、音注の一部を除き、基本的には作者自注と認めてよいという。筆者もその見解に従いたい。

(24) 白居易の諷諭詩で最も早い時期の作は、貞元二十年（八〇四）の

0016「哭劉敦質」。

(25) 1486「與元九書」に「凡聞僕「賀雨」詩、而衆口籍籍、已謂非宜矣（凡そ僕の「賀雨」の詩を聞けば、衆口籍籍として、已に宜しきに非ずと謂ふ）、元稹「白氏長慶集序」に「而樂天「秦中吟」、賀雨」、諷諭等篇、時人罕能知者（而して樂天の「秦中吟」、賀雨」、諷諭等の篇は、時人の能く知る者罕れなり）」という。0001「賀雨」を積極的に評價したとまでは言えないが、白居易の數多くの詩作からわざわざこの詩を取上げること自體がその特殊性を示している。

(26) 元稹「進詩狀」に「微臣入院之始、學士等盛傳陛下親批「賀雨」章（微臣 院に入るの始め、學士等は陛下親ら「賀雨」一章を批するを盛傳す）」（『元稹集校注』、九五四頁）という。

(27) 0447「朱陳村」の冒頭一聯に「徐州古豐縣、有村曰朱陳（徐州古豐縣に、村有りて朱陳と曰ふ）」という。白居易の父白季庚は長期にわたる徐州の地方官を務め、白居易は幼少期に徐州治下の符離で育てられた。白居易の母の姓は陳であり、母方の祖母陳白氏についても「疾歿于徐州古豐縣官舍（疾みて徐州古豐縣官舍に歿す）」（1469「唐故坊州鄜城縣尉陳府君夫人白氏墓誌銘并序」と記される。母の實家が朱陳村にあった可能性もある。

(28) 靜永健「琵琶引」の成立（『白居易「諷諭詩」の研究』下篇第三章、二八一～三三二頁）を参照。卷十二はもと二巻であった論證は三一〇～三一五頁にある。靜永氏は卷十二の前身に當たる二巻は本來感傷詩ではなかったとするが、筆者はやはり感傷詩であったと考える。

(29) 岡村繁『白氏文集 二下』（明治書院、新釋漢文大系、二〇〇七年、七一～九頁）に「第七集卷」とは、……元和十年（八一五）初編「白氏文集」における編次なのか、あるいは「九」を「七」に誤ったのか、不明」という。管見の限り、他の研究者の多くも「第七集卷」が詩集十五

卷の巻次であったと見なす（謝思煒『白居易詩集校注』八九五頁、靜永健『白居易「諷諭詩」の研究』、三〇九〜三二〇頁など）。しかし、本稿二―（二）以下で述べたように、『白氏長慶集』には、明らかに元和十年から長慶四年までの間に詩を追加した痕跡があり、筆者はあえて異説を提起する。

(30) 紹興本には百首でない巻もあるが、現存資料によつて復元し得る可能性がある。

(31) 正確に言えば、0804「和夢遊春詩一百韻」は「古調詩」に分類されるべきであろう。また、巻十四には主に元和九年の詩が収録されるが、巻末の0804「和夢遊春詩一百韻」は元和五年の作。

(32) ちなみに、『白居易2193「後序」は元稹による『白氏長慶集』編集に言及して、「前三年、元微之爲予編次文集而敘之。凡五帙、每帙十卷、訖長慶二年冬、號『白氏長慶集』（前三年、元微之 予が爲めに文集を編次して之に敘せり。凡そ五帙、每帙十卷、長慶二年の冬に訖りて、『白氏長慶集』と號す）」という。五十巻本を「十卷×五帙」にまとめたというこの記述によれば、元稹の數字に對する拘りのみならず、巻帙というテキストの形態的要因も考慮に入れる必要がある。表一に示したように、白居易が『後集』を増補した時には必ずしも「每帙十卷」に拘らないようであるが、實際には幾度にも及ぶ編集過程を経て、整理済みの巻に作品を追加したり、巻次を調整したりしたのであろう。比較的まとまっているのは、巻五十一〜六十、巻六十一〜七十の二つの部分であり、やはり「每帙十卷」の形態と關連があるように見受けられる。